

ひどい風邪を引いたおんどりがいました。せきが出て出て、歌も歌えないほどでした。すると、年とっためんどりがいいました。

「サン・ベルリコカンへ行って、温泉の水を飲むといいわ。あれほど風邪に効くものはありませんもの」

おんどりは、サン・ベルリコカンの温泉に向けて出発しました。とちゅうで、ねこに会いました。

「どこへ行くの、おんどりさん」と、ねこはききました。おんどりは、

「サン・ベルリコカンへ温泉の水を飲みに行くのさ。ひどい風邪で歌も歌えないんだ」といいました。すると、ねこは、

「おや、ぼくと同じだ。ぼくもひどい風邪で、にやあにやあ鳴けないんですよ。いっしょに行きましょう」といって、ついて来ました。

ふたりが歩いて行くと、がちように会いました。

「どこへ行くの、おんどりさんにねこさん、」

「サン・ベルリコカンへ温泉の水を飲みに行くのさ。ひどい風邪で声が出ないんだ」

「おや、ぼくと同じだ。ぼくもひどい風邪で、があがあ鳴けないんですよ。いっしょに行きましょう」

三人が歩いて行くと、やぎに会いました。

「どこへ行くの、おんどりさんにねこさんにごちようさん、」

「サン・ベルリコカンへ温泉の水を飲みに行くのさ。ひどい風邪で声が出ないんだ」

「おや、ぼくと同じだ。ぼくもひどい風邪で、めえめえ鳴けないんですよ。いっしょに行きましょう」

四人が歩いて行くと、ろばに会いました。

「どこへ行くの、おんどりさんにねこさんにごちようさんにやぎさん、」

「サン・ベルリコカンへ温泉の水を飲みに行くのさ。ひどい風邪で声が出ないんだ」

「おや、ぼくと同じだ。ぼくもひどい風邪で、いななけないんですよ。いっしょに行きましょう」

五人は、歩き続けて、夕方、サン・ベルリコカンの温泉に着きました。おいしい水を好きなだけ飲んで、風邪もすっかり治ったようでした。

帰り道、もう日が暮れて来たので、ろばが、

「ひと晩泊まれる宿屋を探そう」といいました。そこで、ろばの背中にやぎが乗り、やぎの背中にがちようが乗り、がちようの背中にねこが乗り、ねこの背中におんどりが乗って、あたりをながめました。

「むこうの森のはずれに、きれいな家があるよ」と、おんどりがいいました。みんなは、その家に向かって歩いて行きました。

家に着いたときにはもうまっくらでした。おんどりが戸をひっかきましたが、返事がありません。ねこがとびらの取っ手を引きましたが開きません。がちようが窓ガラスをつつき、やぎがとびらをつのでつきました。けれども、家の中はしーんと静まり返っていました。ねこが、かぎ穴からのぞいていいました。

「光る点がふたつずつ、見える」

それは、おおかみの目でした。五人は、七匹のおおかみの家に来てしまったのでした。ろばが、

「さあ、みんな、行くぞ。ようい！」とさけびました。そして、五歩後ろに下がって、頭を下げて、はずみをつけてとびらにつっこみました。とびらが開いて、五人は中に飛びこみました。おおかみたちは、びっくりして、走って逃げて行ってしまいました。

テーブルには食事のしたくができていたので、五人はお腹いっぱい食べました。それから、めいめい、寝る場所を選びました。

「ぼくは火のそばで寝るよ」と、ねこがいいました。

「ぼくは、いすの背中に止まって寝るよ。夜が明けたら、みんなを起こしてあげる」と、おんどりがいいました。

「ぼくは、テーブルの上で寝るよ」と、がちようがいいました。

「ぼくは、ベッドの下だ」と、やぎがいいました。

「ぼくは、とびらのそばだ」と、ろばがいいました。

みんなは、ぐっすり眠りこみました。

さて、おおかみたちは、森の真ん中まで逃げて来ましたが、年とったおおかみが、「もしかしたら、逃げ出すのが早すぎたんじゃないか」といいだしました。そこで、一番年下のおおかみが、様子を見に家にもどることになりました。

もどってみると、家は静まり返っていました。そこで、そつと中に入り、明りをつけようと、かまどの炭火にわらを近づけました。ところが、炭火と思ったのは、ねこの光る目が光っていたのでした。ねこは、おおかみをひっかいて、顔につばをはきかけました。

おおかみは、びっくりして、いすまで後もどりしました。すると、おんどりが、おおかみの鼻をつきました。

おおかみは、テーブルまで後もどりしました。すると、がちようが、おおかみの背中にかみついて、毛をひとかたまり引き抜きました。

おおかみは、ベッドまで後もどりしました。すると、やぎが、つので、おおかみのおしりをつきました。

おおかみは、戸口まで後もどりしました。すると、ろばが、後ろ足で、おおかみを思い切りけ飛ばしました。おおかみは、戸口から外へ転がり出ました。

おおかみは、仲間の所にもどっていいました。

「家の中には、危険なやつがおおぜいいるよ。かまどには、コックがいて、ぼくをフォローでさして、顔につばをはきかけたんだ。いすには、家具屋がすわっていて、くぎでぼく

の鼻をついたんだ。テーブルには、鍵屋がいてペンチでぼくの毛を引き抜いた。ベッドの下には、お百姓がいて、熊手でおしりをついたんだ。戸口には、きこりがいて、おのでぼくをたたき出したんだ。いいかい、みんな。あの家にもどってはだめだよ」

けれども、年とったおおかみが、

「おまえの見間違いかももしれないぞ。夜が明けたら、調べに行こう」といいました。

空が白みはじめると、七匹のおおかみは、一列になってもどって行って、戸口のところで耳をすましました。

おんどりは、明るくなったのに気がついて、仲間を起こそうと、思い切り大きな声でさけびました。

「コケコッコー！」

すると、みんなが目覚まして、大きな声で答えました。

「にゃあ、にゃあ！」

「がっがっ！」

「めえめえ！」

「ひひーん！」

おおかみたちはこれを聞くと、恐ろしくて、死にもぐるいで逃げ出しました。やっと、森の真ん中までもどると、年とったおおかみはいいました。

「隊長の戦いのさけびを聞いたか。兵隊たちのラッパを聞いたか。あそこは危険だ。この国を出て、もっと安全な場所を探すでしょう」

五人は、さつさと村に帰りました。もしかまだ死んでいなければ、今でもそこにいますよ。

原話…『フランスの昔話』新倉朗子訳／大修館書店
再話…村上郁